



# オクサン 倶楽部



1993年 初夏号



「お茶をいただく」と、古めかしい言葉を使いますが、お茶のほうでは皆いただくと申すのです。天地の恵み、人の努力でできたものですから、いただくと言うのです。お茶と申しますが、いろいろありますが、私どもがいただきますのは、碾茶と申しまして、葉茶を石の臼で粉にひいたものです。元来お茶と申しますものは、中国で発達したものでありまして、鎌倉時代に禅僧が、宗教、すなわち禅とともに入れたものであります。それが長い間のうちに、その中国風がすっかり日本化したのであります。

元亀、天正の頃には中国で夢にだに見なかつた茶の湯の道として大成しました。精神的には禅の思想を行動の中にとらえようと、物の面では個と全体の関係を意識せしめ、作意といって、すべてを生かすことを重んじています。その生かされたものは、実に美しいのだれもが嘆息を漏らすものではなくてはならないとしています。茶室建築は木造建築物の粹です。造園の粹は露地にあります。それは桂離宮や、修学院離宮がよく物語っています。またその中の礼儀作法、あるいは道具の美しさは言うまでもありません。中国から入った喫茶法ですから、自然、初めは中国産の道具でしたが、おいおい日本

のものと変わってきます。途中では朝鮮のものもとり上げています。中国のものは、その礼

精神によるものか、みな一様に堅苦しいものですが、朝鮮のものはすべて数歩退いてボケています。そのボケているところが変化していく。茶の湯には最もふさわしいものです。すなわち佗び茶にふさわしいものです。そうして年久しく使っていくうちにだんだん変化して

きて、自然にふさわしいものになっていくのです。そこに目をつけたのが、茶の湯の人の眼識でありました。

茶の湯にあらわれた美意識の中で、最も特筆すべきは簡素の美ということです。すべては必要なもののみで、 unnecessaryなものはいっさい退けられる。目に見えるもの、耳に聞くもの、鼻にかぐもの、口に食べるもの、余分なもの、 unnecessaryなものはみな省いて、反面、必要な

## 茶の湯の美

佐伯江南齋

茶席に使われる、諸道具を一つ一つとり上げて見てみると、型の整っていないものが使われていたりします。その物の持っている良き性質を活かした、場所、色彩、空間の中により引き立たせる演出を致します。

故ゆる、生活美の意識観念の中に、物を活かされる美が生まれてくるのではないのでしょうか！

天地自然の美ではなく、素朴な人間工夫の美なのです。

### 四代目

#### 佐伯江南齋

昭和十八年二月

木村宗憲（前表千家理事）の四男として船場に生まれる

家業は祖父より表千家の茶道教授

二十才の時、武者小路千家佐伯家の養子となり、茶華道を学ぶ

昭和四十年

武者小路千家元先代有隣齋宗匠に師事、修業に入る

昭和五十七年

乱師授与

昭和五十八年

四代目佐伯江南齋を襲名

平成五年

武者小路千家官休庵家元教授任命

現在、財団法人官休庵常任理事

華道遠州流本部四世家元



# しゃぶ しゃぶ 久壺庵開店

千利休 (一五三二) - (一五九一)

安土、桃山時代の茶人。千家流茶道の開祖で堺の人。号は宗易、のち不審庵。草庵風の茶室を完成し茶道を大成した。織田信長・豊臣秀吉に仕え重用され、天正一三年(一五八五)正親町天皇より利休号を与えられ、天下第一の地位を占めたが、のちに秀吉の怒りにふれ切腹。

## 「利休居士七ヶ条」

花は野の花のやうに  
炭は湯の沸くやうに  
夏は涼しく  
冬は暖かに  
刻限ははやめに  
降らずとも雨用意  
相客に心をつけよ

### 新店舗「久壺庵」の由来

禅語に「壺中日月長」という茶席の一行があります。壺中とは「壺中の天地」のことで

中国の後漢の時代、汝南の町中に葉を売る老翁がいました。人々は、この老翁を壺公と呼んでいました。それは、常に一つの壺を店先に掛けていたからです。ある日、費長房という役人が、店先に掛けてある壺の中に案内され

### よい師匠との出会い、よい仲間との出会い

利休の手法を伝える表千家を代表する草庵茶室の不審庵や、古田織部好みの三疊台目を参考に造られた「久壺庵」においての一服。

茶室の中は外界から遮断され、タイムカプセルのような永遠の時間を経験する瞑想空間。その空間で、お点前のお稽古だけをすればなく、流派に関係なく仲間、流手にお茶を点てて喫んだり、

# 喫茶茶

大徳寺第一九六  
住持、大通智  
勝禪師、伝外宗  
左筆  
延宝三年(一六七五)六十八歳にて没。

### 喫茶茶

(訓)「まあ、お茶を一服おあがり」というさりげない一語であるが、中国では日常の用語で有名になったのには、名高い趙州和尚が、誰が訪れてきても「喫茶茶」と本槍でお相手をしたという因縁がある。

## 日常の茶

茶道は人の歩み、人の行なう道であるということである。いかに生きるか、いかに行なうか、いかに人生を歩むか、それを教える。

茶道は遊戯でもなく、たんなる芸能でもない。茶道は人生の根本を律するモラルと考えていたできたのである。

茶道という道を行じ、

修じ、それによって心を鍛える。このような厳しい修道に徹してのちに、ほっと息つくだけのゆとりを見いだしたら、その人は立派に道を行じたことになるのです。ひとりひとりが十分にそのことを自覚し、実践がともない、たとえ最初はほんのひと握りの人の力であっても、それが積み重なると、いずれも全国的な巨大な運動となり、社会の善導、世なおしにも通ずることになるのです。

具体的にどうすればよいかと申しますと、(道)(心)学(茶道文化)実(技と実践)の三つの調和をよく実践することです。

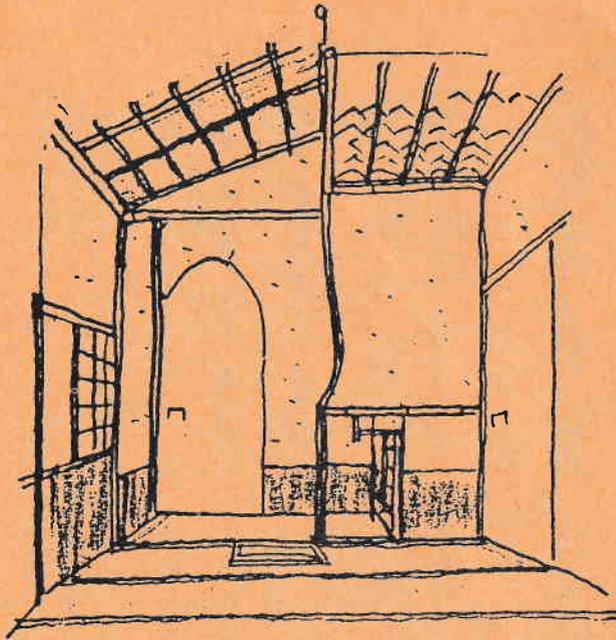
事理ということばがあるが、事と理とは一体のものである。事が熟すれば、心も熟する。行も熟するのである。点前作法だけに片寄せず、正しい茶道の根本精神を把握することにある。

そのところをよくわきまえて、茶の道に励んでいたとき、日常生活にも普遍されたものです。本来の真意をわきまえず、いたづらな思いつきだけで、深い伝統のなかで育まれてきた茶の湯の規を超えてしまうことは、よい「働き」とはいえない。形にとらわれて、茶道の本意を誤ってはならない。

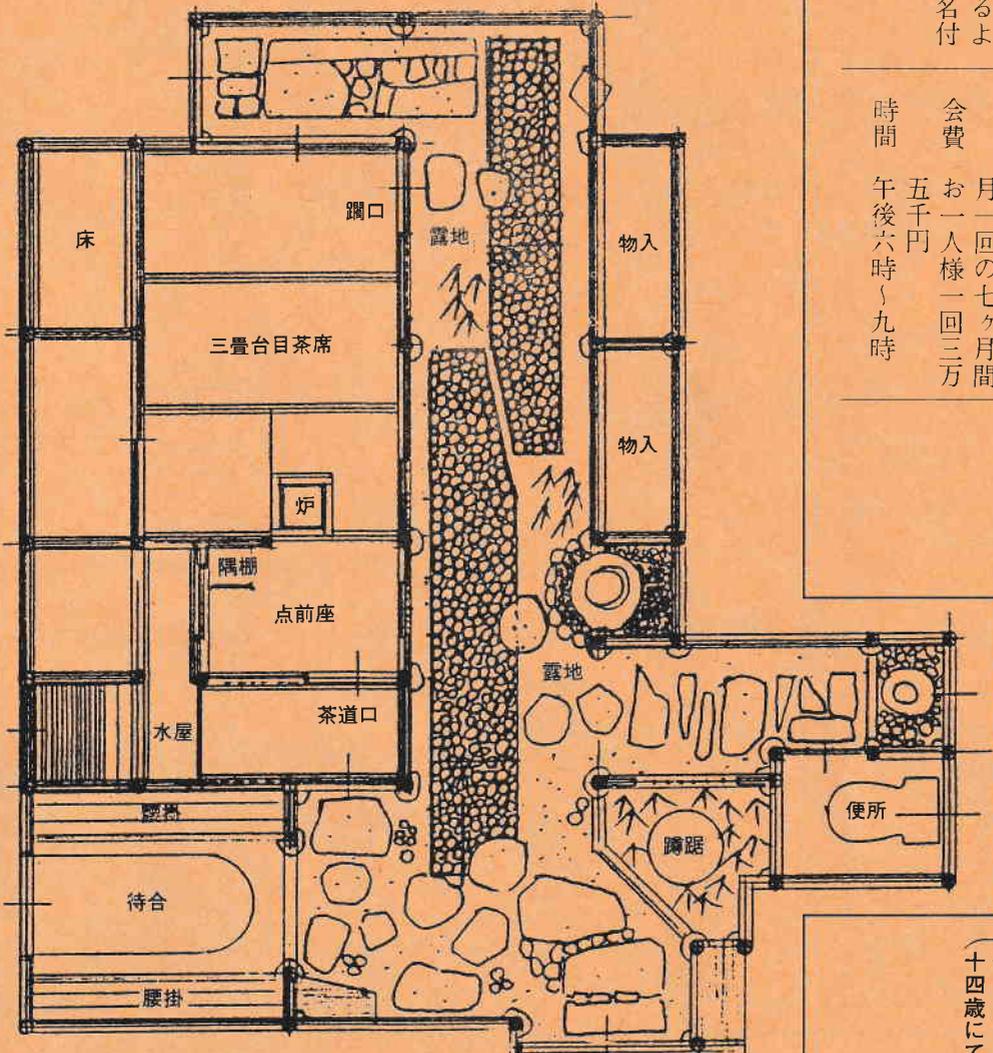
佐伯江南齋



筆匠宗齋徹不元家家



点前座



「久壺庵見取図」 玄関

三千家の一、武者小路千家官休庵常任理事佐伯江南斎宗匠ご監修のもと、現代における数寄屋建築の名工たちを招聘し、選び抜かれた材を用いて、久壺庵は街中のビル内において、野趣に満ちた造りにしつらえられました。

設計 一級建築士 梅垣 浩  
 施工 (株)キンキ企画 片岡四郎



### 扁額 武者小路千家

てみると、立派な建物があり美酒、佳肴(おいしい料理や珍味)が並んでいた— という故事から、俗界を離れた別天地や仙人の住む仙境を意味します。これが更に転じて、悟りの妙境にもたとえられています。

草庵で、くつろいでいただき……壺中に入った費長房が見た美酒、佳肴に会うことができるように「久壺庵」は名付けられました。

茶室・茶庭・歴史等を調べたり話し合ったりし、茶料理(懐石)をいただく。

わび茶と呼ばれる今日の茶道の源流である千利休の流れをくむ三千家、武者小路千家常任理事の佐伯江南斎宗匠を囲んで、茶心の世界に浸る。

日時 毎月第一土曜日  
 (初回は七月二日)  
 月一回の七ヶ月間  
 会費 お一人様一回三万五千元  
 時間 午後六時～九時

# 名利共休

名利共休

名利共休

表千家十一代 碌々斎筆  
 明治四十三年 (1910) 七十四歳にて没

(訓) 名をあげんがため、利益を得るがために生きるのではなく、それらを断ち切って進みたいもの。利休居士の号はこの言葉より出ているといわれる。

